

あいさつの輪

中 三

あいさつは人と人をつなぐ言葉。この小さなつながりが、人々の大きな支えとなり、この町を守っていくものとなる。

「おはようございます。」

朝練習で学校に向かう通り道、私は毎朝近所に住んでいるおじいちゃんとあいさつをする。

「おはよう。」

笑顔で返してもらえると、今日もがんばろうと思える。毎朝家の周りの庭を手入れしているおじいちゃん。子どもが好きで、小学生の登校時も横断歩道に立って旗を揚げ、子ども達の安全を見守っている。あいさつの始まりは私の軽い会釈で、その時もおじいちゃんは笑顔で返してくれた。そしていつの間にか、それが日常になっている。

最近、高齢者の孤独死のニュースをよく耳にする。これは、外部との関わりをもたない一人暮らしの老人が増えているからではないだろうか。父

から聞いた話だが、私の家の近所でも高齢者の一人暮らしの方が、亡くなってから一カ月以上経って発見されたそう。亡くなって何日経っても誰にも気づかれなかった。私の身の回りでそのようなことが起こってしまったのは、それだけ人付き合いが希薄で近隣との関わりが少ないからだと思う。また孤独死は寂しさからも引き起こされる。誰とも関わることもない毎日を過ごしていると、次第に孤独になり、自身の寿命さえも縮めてしまう。

さらに、認知症の患者が事件に巻き込まれるニュースもよく聞く。驚いたことに日本には認知症を発症して行方不明になっている人がおおよそ一万人いるそう。その中には家族に見つけられずに亡くなってしまいう人も少なからずいるという。一人で家を出て、帰り道がわからなくなってしまう人もいるそう。このような事件が増えていくのは、それだけ現代の地域社会の結びつきが弱まり、自分以外の人に関心をもたなくなっているからではないか。

私は、これらの問題を救うきっかけとしてあい

さつがあるのではないかと考えた。あいさつは大抵、目を見て向かい合ってする。実際に相手の姿が見えるところである。おじいちゃんとは、平日は毎朝あいさつを交わしている。だから、もしおじいちゃんに会えなかったら、今日はどうしたのかなと気にするし、それが何日も続けば、何かあったのかと心配にもなる。あいさつを交わすことで、自然とその人への関心が深まる。あいさつを交わし合うことで、周りの人の温かい声も増えていくだろう。人は誰でも年をとっていく。年をとれば、やはり一人になってしまうお年寄りが多くなると思う。そんな時すぐに助けられるのは遠くの家族ではなく、地域の人たちだ。地域の中であいさつが増えれば、人とのつながりが増える。人とのつながりが増えるという事は、地域全体が助け合える存在になるということだ。

また私はこんなことも経験した。ある冬の日、私がまだ小学生だったときのことだ。学校帰り、いつものように家の鍵を開けようとしたが、鍵が見つからない。朝、鍵を持たずに出かけたことを思い出した。私の家は両親が共働きで、家に帰っ

てくるのは遅い。その日の北風は冷たかった。「どうしよう。」体が冷えて心も折れそうになった。そのとき隣の家のお母さんがちようど帰ってきた。玄関の前でランドセルを開いている私を不思議に思ったのか、すぐに

「どうしたの？」

と声をかけてくれた。鍵を忘れたことを力なく言う、

「そっか。じゃあ、お母さんが帰ってくるまで家で待ってな。」

と、家にながらせてくれた。体が温かくなると同時に、心もホツとし、不安が取りのぞかれた。隣の家のお母さんの優しさが心にしみた。私の家では隣の家とは家族ぐるみの付き合いができて、それも、きっかけはあいさつからなのだ。あいさつを通しての強いつながりがあったからこそ、あの時の私は救われたのではないかと思う。家族以外の誰かが気にかけてくれるというのは、何より心強いことではないだろうか。

人が生きていくうえで欠かせないこと、それは人と人とのつながりだと私は思う。お互いに声を

かけ合って助け合う、そんなつながりのある街をつくりたい。最初はほんの少しの勇気でいい。そうすれば少しずつ、大きな輪に近づいていく。あいつを通してから、この町が一つの家族となれるように。

今日も私は、いつものように朝練習に向かう。

「おはようございます。」

「おはよう。いってらっしゃい。」

新しい一日が始まった。

